



神戸市在住
対談の会場となった本上田邸の家主。
祖父が亡くなって以来、空き家になって
いた屋敷を昨年改修。神戸市と丹波市を
行き来しながら、本上田邸を地域活性化
拠点にしようと奔走中。



東京都出身
本上田邸で「染織工房こおり舎」を運営。
管理人も兼ねる。県内唯一の養蚕農家に
弟子入りし、蚕の育て方を学ぶ。自家製の
繭を使って糸を引き、草木で染め、織
りまですべて一人でこなす。



姫路市出身
山のふもとの木工房 WOOD-TOP を運営。
半農・半木工の生活を実践中。人とのつ
なかりを大切に制作活動に打ち込んでい
る。現在は、イベントの企画・運営にも
積極的に取り組む。



丹波市出身
平成 26 年 4 月から棚原自治会長を努め
る。兼業農家を経て、早期退職後は農業
に打ち込み活躍。棚原のよさを外部に発
信したいと思案中。

乾 半農・半木工の生活がしたいと思って、7 年前に丹波市に移住しました。阪神間から 1 時間程度と便利な距離でありながら、大好きな木工と農業がどちらもできる環境に魅力を感じました。今は、自分で作った米や野菜を自作のテーブル、椅子にかけて食べる最高の「自分づくし」暮らしを満喫しています。

原田 ここに住もうと決めたのは「直感」でした。私は、県内唯一の養蚕農家である柿原さんに会いに丹波市に来ました。単純にまちの雰囲気、穏やかな山の景色がいいなあと思ったんです。現在



原田さん、乾さんともに美しいと絶賛する三尾山を望む田園風景

は、「染織工房こおり舎」を立ち上げ、自分で育てた繭から糸を引き、着物などをつくっています。丹波市には、昨年 5 月に移住してきたばかりです。

上田 私は、神戸市と丹波市を行ったり来たりして、都会と田舎のいいところどりをして生活しています。祖父がなくなつて以来、40 年近く空き家になっていた本上田邸を昨年改修し、原田さんに家の一部を自宅兼工房として提供し、家の管理もお願いしています。子ども時代に自然の中で遊び、育ててもらったよきふるさと丹波市に貢献すべく、本上田邸を地域活性化拠点として活用したいと考えています。

近藤 私は、丹波市を一度も出たことがありません。田舎の長男は高校を卒業したら、家を継ぎ、会社勤め、農業をするものと思い、そのとおりに生きてきました。すべてが当たり前で「都会へのアクセスのよさ」や、「穏やかな

山の景色のよさ」がピンときませんでした。移住者の方々と接するようになってからは、自分の住む場所を客観的に見つめることができるようになり、素晴らしい場所で生きているんだと思えるようになりました。

乾 当たり前にあるもののよさって、気づきにくいんですよ。移住者は以前に住んだ場所と比較するから気づく。はじめて来たころ、水や空気が、米や野菜のおいしさに感動しました。7 年経つと当たり前になっちゃいましたけど。

上田 丹波市に対して、多くの人が田舎のイメージを持っていて、都会からは遠いと感じてしまいがち。しか

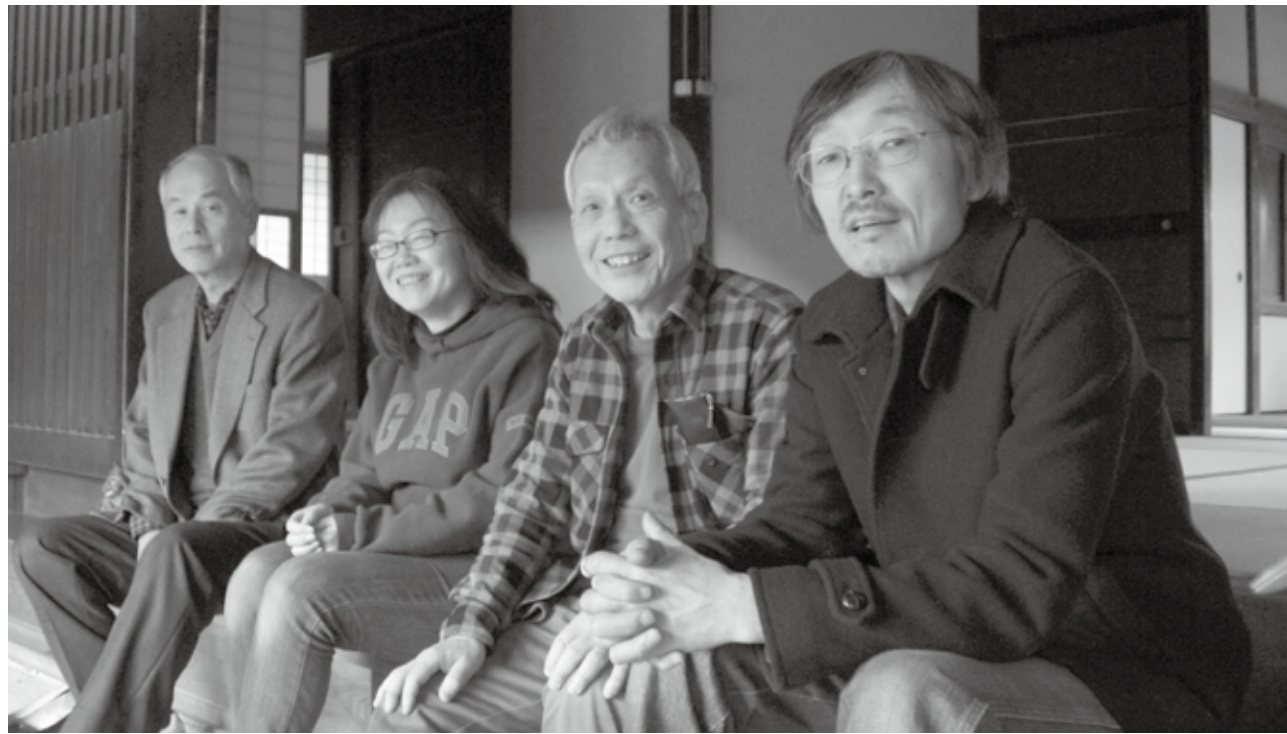
し、阪神間と丹波市は車でたった 1 時間程の距離です。私のように都会と田舎の両方を満喫する生き方もできると知ってほしいですね。

近藤 丹波市は、隣近所の家の間取りも分かるような密接な人間関係が残っていて、互いに助け合って生活しています。都会との程よい距離と田舎らしい自然と人間関係が両立していることを誇りに思います。



本上田邸に残る農機具。子どもたちは興味津々。

それぞれの生きるカタチ 私が丹波市に住む理由



左から近藤眞治棚原自治会長さん、原田雅代さん、上田正三さん、乾善弘さん

十人十色の丹波物語

愛する土地で生きる

私たちのまち丹波市。「あなたにとって丹波市はどんなまちですか」この問いかけに、あなたはどうか答えますか。

私たちにとって当たり前の何気ない日常に魅力を感じ、自分らしく生きられる場所として、丹波市を選んだ人たちがいます。それぞれ違う住み方をしている 4 人に、この地で住まう幸せについて語ってもらいました。



対談の場所となった本上田邸



対談が行われた築 120 年の屋敷本上田邸のようす。

手仕事の集大成

築 120 年の屋敷 本上田邸

春日町棚原にある本上田邸。上田正三さんの祖父確郎さん亡き後、40 年近く空き家になっていた屋敷を昨年改修。屋根や水回を中心に手をいれ、大部分は建てられた当時のままの姿を残している。

上田本家の屋敷のため、本上田邸と呼ばれる。推定樹齢 450 年のくすの木が中心に据えられた美しい庭園、欄間、ガラス、木戸すべてが職人の手によってつくられた、手仕事の集大成ともいえる屋敷。



昨年11月7日から23日まで、本上田邸で行われた丹波の手仕事展は来場者が1,000人を超え、盛況のうちに終わりました。①森のカフェを開店。手づくりコーヒーや菓子が並びます②和のイメージを大切にしたい手仕事展のチラシ③コーヒーを片手に作品鑑賞④乾さんの出展ブース⑤庭園でのコンサート⑥原田さんの出展ブース⑦地域の古文書を展示⑧土日には庭で地元産野菜の販売も行われました⑨丹波布の糸くり実演⑩原田さんの染色体験教室



作家だけでなく、地域住民の手仕事作品も展示しました。

乾 「住み開き」を実践したのが今回の手仕事展です。私と原田さんを含む仲間が企画を練り、準備・運営しました。生活スペースを確保した上で、邸内の一部を開放し、8作家、1団体の作品を展示。庭はカフェやコンサート会場として開放し、紅く色づくもみじを見ながらくつろいでもらえる空間にしました。

近藤 改修工事の段階から、地域住民は興味をもっていました。空き家だった「だれもが知る大きなお屋敷」が突然工事を開始したわけですから、イベントの開催を宣伝すると「あの屋敷の中に入れるのか」と聞かれるほどでした。

乾 地域の方に興味をもってもらえたことは本当にうれしかったです。

上田 「丹波の手仕事展」は手仕事を生業とする丹波市在住の作家の作品を集めた展示会です。私は地域のシンボリックな屋敷であるこの本上田邸を改修し、地域活性化拠点にしたいと考えていました。その具体策が、住みながら屋敷の一部を地域などに開放する「住み開き」です。

乾 「住み開き」を実践したのが今回の手仕事展です。私と原田さんを含む仲間が企画を練り、準備・運営しました。生活スペースを確保した上で、邸内の一部を開放し、8作家、1団体の作品を展示。庭はカフェやコンサート会場として開放し、紅く色づくもみじを見ながらくつろいでもらえる空間にしました。

上田 上田家はかつて庄屋を務めていたこともあり、日常的に家族以外の人が邸内に入っていました。そのため、邸内の土間や廊下にある木戸には鍵があり、家族の生活スペースを区切ることができるようになっています。この屋敷そのものが元々「住み開き」の機能をもっているんです。

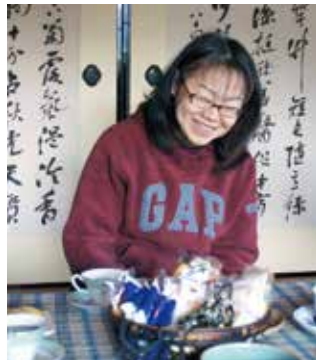
原田 私は、今回の手仕事展は、自分と工房の紹介の場だと思って取り組みました。丹波市に来てまだ日も浅いので、どんなことをしているのか、わかるようにしました。この地で育った蚕の繭から糸を引き、機を織る。先人たちが守り続けてきた文化・技術なので、地域の人にこそ伝えたいと思いワークショップも行いました。



乾 「丹波の手仕事展」は手仕事を生業とする丹波市在住の作家の作品を集めた展示会です。私は地域のシンボリックな屋敷であるこの本上田邸を改修し、地域活性化拠点にしたいと考えていました。その具体策が、住みながら屋敷の一部を地域などに開放する「住み開き」です。

scene 3 地域に愛されるために

丹波の手仕事展【平成27年11月7日～23日】



近藤 移住者と地域をつなぐのも、蚕や木工、農業など、地場産業を盛り上げてくれる移住者の存在をうれしく思っているはずですよ。

原田 私は好意的に受け入れてくださったと感じています。本当に感謝しています。少なからず人間関係に苦労するとは思っていましたが、そんなことはありませんでした。家主の上田さんの存在も大きかったですね。

上田 私は近藤自治会長と連絡を取り、自治会入りの準備をするなど、原田さんが移住しやすい環境をコーディネートしました。移住者にとって地域のルールはわかりにくいもの。地域と縁のある人間が移住をサポートする必要があると思いますね。

近藤 それは心強いですね。農業分野は、農地をはじめ、地域に接点がないと解決できない問題がありますしね。例えば、そうなんです。例えば、そうなんです。例えば、そうなんです。

乾 それは心強いですね。農業分野は、農地をはじめ、地域に接点がないと解決できない問題がありますしね。例えば、そうなんです。例えば、そうなんです。例えば、そうなんです。

近藤 移住者と地域をつなぐのも、蚕や木工、農業など、地場産業を盛り上げてくれる移住者の存在をうれしく思っているはずですよ。

原田 私は好意的に受け入れてくださったと感じています。本当に感謝しています。少なからず人間関係に苦労するとは思っていましたが、そんなことはありませんでした。家主の上田さんの存在も大きかったですね。

上田 私は近藤自治会長と連絡を取り、自治会入りの準備をするなど、原田さんが移住しやすい環境をコーディネートしました。移住者にとって地域のルールはわかりにくいもの。地域と縁のある人間が移住をサポートする必要があると思いますね。



乾さん家のお手製のリンゴケーキをいただきながら対談がすすみます。

乾 丹波の伝統技術や手仕事の集大成ともいえる本上田邸は「丹波の手仕事展」を行う会場としてびつたりでした。来場者の方が「時間がゆつくり過ぎる」「どこか懐かしい気持ちになる」と話されていたのが印象的でした。

原田 開催時期を紅葉の季節に設定したので、市外の方も多く来ていただけでしたが、迷う方が続出。これは予想外でした。ただ「景色がよくて迷うのもいい体験になった」と丹波市を心底楽しんでる方もいてうれしかったですね。

近藤 地域の方が道案内をされた話も聞きましたよ。そういうハブニングもイベ



丁寧な手仕事でつくられた作品にそっとふれる来場者

ントが地域になじむ機会になると思います。「ここはいとこです」とPRするだけでは人は来ないけれど、手仕事展のようなイベントがあれば市内外に丹波市の魅力を発信することもでき、人も来る。今後はもっと地域の人も参加して、地場野菜や加工品などの出店も増えるといいですね。

上田 農業もまさしく手仕事ですからね。今年はぜひ実現したいですね。本来は住居であるこの屋敷が、イベントをすることで丹波市の魅力の発信拠点になれることを実感しました。

原田 今回がはじめてのイベント開催だったので、あまり大きな規模にせず、本上田邸

scene4 1の地でめさすもの
愛するまちのためにできること

近藤 上田さんに「本上田邸をふるさとに貢献できるような場所にしたい」と言われた時、感謝の気持ちで一杯でした。上田さんや移住者の人と接するとその熱意に驚くと同時に、その源に「豊かな自然」「おいしい食べ物」「温かいご近所づきあい」など丹波市で住む幸せという想いがあることに気がつきました。

乾 確かにそうですね。私はこの暮らしが気に入り、とても充実しています。だからこそ、作家として丹波市で役に立ちたい。現在は木工の技術を生かし、丹波市の子どもたちに手仕事の楽しさ、素晴らしさを伝えたいと考えています。夏休みに本上田邸で木工・染織、陶芸などを体験できるワークショップを原田さんと企画中です。

上田 近藤さんからは丹波市への熱い想いが伝わってきます。移住者を温かく受け入れ、地域の人との接点になろうとされている。それはこのまちへの愛があつてのことだと思います。地域の人の努力や想いが住みよい、移住したい丹波市をつくっているんですよ。

原田 私自身が地域の人のひたむきな努力にひかれ、この地にやってきました。私が弟子入りの養蚕農家の柿原さんはたった一人で丹波の養蚕技術を守ってこられました。私の最大の目標は、養蚕が盛んだったこの地で養蚕を復活させること。そのためには、まずは7反の桑園の維持が目標です。桑園は一度つぶすと復活が難しいので、がんばります。

上田 私は原田さんのように丹波市でがんばる人たちの水先案内人になりたいんです。本上田邸は地域のパートナー（一部分）で、使い次第でまったく違う顔を見せてくれます。ある時は工



房、ギャラリィ。ある時は、ライブ会場、能の舞台。この本上田邸をたくさんの人々の夢や想いがカタチになる場所にしていきたいと思い、使い方を募集しています。いろいろなアイデアを聞きたいですね。

近藤 私も、丹波市で生きるからにはこの地で生きる幸せを感じられる生き方をしたいですね。私は、まずは地元のみんなで力を合わせて農業を発展させていきたいです。

一同 一緒にがんばっていきましょう。



の中ですべて完結するようにしましたが、今後は徐々に地域の人などを巻き込んでいきたいですね。

近藤 できることがあれば、協力します。市内外の人が訪れるイベントは地域にとって大きなチャンス。なにより自分の住む場所に来てくれた人に楽しんで帰ってもらいたいですよ。今後も上手く協力体制を築きたいです。

乾 ありがとうございます。イベントを通じて、手仕事を丹波市の1つの魅力として広めていけば、農や食に次ぐ、新たな観光資源になると思います。丹波市に訪れる人が増えれば、また作り手も増えてくると思いますよ。

丹波の手仕事展×本上田邸
出展作家紹介

丹波の手仕事展の出展作家を紹介します。丹波市に住み、モノづくりの心を大切に手仕事をする作家たちです。乾さん原田さんを含め、8作家1団体が出展しました。



工房木楽屋 永瀬水晴
藤やつるなどの素材を生かし、かごや灯りを編む。



工房木楽屋 永瀬浩之
木を生かして寄木にし、インテリア小物を制作。



匡山窯 山口匡弘
花器、食器、門燈など多種類制作。



丹波布技術保存会 技術者協会
手紡ぎ綿を草木で染め、織る。工程は国の無形文化財に指定。



染織工房布遊 大原紘子
草木染の糸で手織りで仕立て、服やバックを制作。



閑心窯 大杉康伸
シンプルで素朴な器をつくる。



工房悠夢 平谷悠律子
手紡木綿、絹糸を草木などで染め、絨織で着物や帯を制作。